

## 政治、倫理と学問の関連性／ —幕末、明治初期を中心として—

ダヴィッド・ラブス\*

### 1. はじめに

歴史家の本来の目的は、過去の研究、もっと正確にいうと、過去のイメージを作ることだと考えられるが、その際、歴史を記述する本人が生きている現在の価値観や方法論などを、意識的にも、無意識的にも、過去に投影することになる。なぜなら、歴史家の仕事の究極の目的は、過去そのものに、ひいては現在にも、意味を付与しなければならないことだからである。また、当該の過去のイメージを現在に持ち込んで一特に、近現代史の場合は、まさにそうだと思うのが一現在との関連性を吟味する。

「過去のイメージを作る」と言っても、“歴史家は、研究している時代をなるべく客観的に、なるべく正確に、記述の対象から離れて、当該時代の現象を厳密に記述すべきだ”という、従来の見解を否定するわけではない。従来記述の仕方が有効な場合も多いだろう。ただ、そうした類の記述の方法は、過去の出来事を、むしろユニークで、繰り返すことのできないものとしてみるため、過去と現在との関連をやや薄めて捉えることになり、結果として、学問の細分化を拡大させることにつながるものが懸念される。

そこで、「日本とは何か」という広いテーマ設定の下、明治初期における政治、倫理と学問の関連性のことを考えるにあたって、ここでは、詳細な記述よりも、適切な度合いで、むしろ現象と現

象の関連を重視し、少し概念的に、これらの関連性を捉えてみたい。

もっとも、こうした立場を取るにあたって、記述の正確さを欠いているとか、結論の根拠が不十分だとかといった厳しい指摘を受けるリスクも想定されるが、オープンな議論に少しでも貢献できれば、幸せである。

では、「日本とは何か」というテーマへの私なりのアプローチは、簡素化して言えば、近代日本社会が形成、誕生しつつあった明治初期に、政治や倫理や学問という三つの次元や要素が、どういう関係にあったのか、ということを考えることになる。

考察の基本的なスケッチは、以下の通りである。多少大雑把に、また、図式的に見れば、幕末時代における実践的な政治は、儒教の倫理に従属的な関係にあり、それが、明治に入ると、急に開放するということになる。そして、開放するとまもなく、合理的だと思われた、西洋、つまり、「外」からの知識やモデルを手がかりにして、「国民統一」という政治的な目標が設定され、政治が、社会における支配的な地位に着き、その役割を確立する。

ただ、その「外」からの知識の受容の仕方には、やや宗教的な色彩が見られる（ここで言う「宗教」とは、キリスト教の意味ではなく、社会の信念的な態度、集団行動の種類を指す）。そして、この政治的な目標は、個人個人の努力によって、将来的な進歩を実現させる、ということである。

しかし、だいたい一世代が交代すると、その進

\*カレル大学准教授

歩という価値が、全社会を統一させるポテンシャルという点においては、不十分だということが認識され、なおかつ天皇を中心にする国体という基礎的観念に対立関係にあることも、表面化するに至る。そこで、儒教が変容した形で歴史的な舞台に再登場して、社会秩序は、道徳と政治と神話という三角から再構成されるようになって、近代史の形成期が終了する、ということになる。

## 2. 幕末の状況

幕末時代は、政局が著しく加速した時代としてみなされているが、総括的にみれば、政治的な利害関係の動的な安定より、むしろ静的な安定のほうが、秩序の前提とされ、仁義や忠孝を中心とする儒教の倫理が、価値の基軸とされていたと言えるだろう。この意味において、当時の重要な政治的な出来事の好例として、文久改革のときの参勤交代制度の著しい緩和と、雄藩大名の影響力の象徴としての政事総裁職の設置など、周知の史実が挙げられる。

その一方、すでに18世紀末から、実践的な政治への需要の増加がみられ、それぞれの藩での日常的な行政、統治、人口管理の事項が量的に増加し、多様化していき、それに何とか対応しなければならない、という認識が出現してきた。

当時、表面化していた諸問題への対応策を模索していくうちに、知識人たちは、学問と統治の関係についても関心を高めた。見解の範囲は、「天下国家の治は徳にあって、智力の能するところにあらず」<sup>1)</sup>という主張から、直感的な判断力、思考能力を発揮した人材やその実力を重視する見方まで、現存する資料に、いくらでも見いだすことができる。

ちなみに、幕末時代の学問の状況の特徴の一つとしては、西洋のローヤル・アカデミーのような組織は存在しておらず、儒学者は、むしろ個人個人で活躍していて、文通などを通じて学んだり、

遊学したりしていた。知識の普及や、社会における知識そのものの重視、といった面からみれば、その状態は望ましくなかったと思える。

さらに、旧来の学問観は、思想界のオープンネス（開放性—「外からのヒントを受け入れる、質のこと」）をあまり支持しなかったことに加え、原理を調べるといった、「窮理」的な側面を、原則として重んじなかった。そういう意味で、たとえば、オランダ医学研究で有名な杉田玄白や大槻玄沢らは、その実験的な好奇心を、「唯自ら好ム所ヨリ為ス所ノ私学ニシテ、公ケニコレヲ修メシニハアラズ」<sup>2)</sup>と、『蘭訳梯航』で書いており、誠に興味深く読むことができる。

つまり、儒教は、思想体系として、「原理を極める」といった知識欲を促進しなかった。それは、普遍的な妥当性を（自己）主張した儒教には、社会状態との密接な関連が認められ、その社会的秩序の是認や理由付けに努める傾向が支配的であったことによる。当然、実験的な観察的な方向付けは、弱かったということになる。

ただ、見方を変えれば、上記に述べた、思想界における組織の不在には、ポジティブな効果もある。今すぐには証明しにくいかもしれないが、思想界の組織の不在が、明治初期の価値観の変動をあれほど速やかに、スムーズに実行できた要因の一つだった、とあえて考えたい。したがって、そのような組織の不在は、間接的に思想界の柔軟性や開放性のポテンシャルを高めたのではないかとと思われる。

しかし、政府と同様、初期の文明開化の知識人たちも、「近代文明」とは何か、という問いを提起し、それを導入しようとしながらも、西洋の物質的な進歩にかなり幻惑されたようである。啓蒙思想家の作品を読むと、一般に、東西思想の差異を、「野蛮」から「開化」<sup>3)</sup>へと進む過程として捉える傾向がよく見られ、東西思想の根底をなす世界観の次元での異質性は、看過されがちだった。

おそらく、その背景には、儒教の一面がある。

儒教実践的な倫理には、「経世済民」的な、世の中の秩序維持など、思弁的な側面より、生活水準にかかわる側面のほうが重視されたのだろう。したがって、必然的に、西洋文明の、当時よく言及された「文明の利器」も、正当化されるようになり、一般的に、かなり受け入れられるようになったのである。

確かに、西洋社会の最大の魅力の一つに、その「功利主義」(utilitarianism)がある。産業生産や社会の政治的な組織性は、社会的秩序に不可欠な柱として見られ、社会全体の生活水準の推進力の元ともされ、そういう意味で、日本の究極の価値であった国力の整備になんとしても必要な前提にもなっていた。

### 3. 「進歩」の観念

その功利主義は、19世紀の近代国民国家と不可分に結びついている。18世紀末から、19世紀のはじめごろ、西洋社会では、支配的観念として、人間の「理性」とそれに追従する「進歩」が定着した。だが、技術的、社会的進歩の実現は、近代国民国家が成立してから、はじめて可能になる。つまり、最初に国民の形成が先行し、その国民という一体が、政治的、社会的な統治、統合の原理となるのである。

それに続き、その国民の進歩と生活水準の向上を保障してくれるのが、ほかならないその国民国家であると、大衆が認め、信用する必要がある。そして、その国家は大衆をいろいろな方法で動員させ、産業生産を通じて、進歩を実現させる。そのような過程で、近代国民という近代神話が発生したのだった。

しかし、西洋の思想史的な文脈で考えてみれば、その「進歩」は、前近代の究極の価値であった、キリスト教的な「救済」に取って代わった、とも言える。キリスト教的な「救済」は、人間の存在理由とされて、世界観の礎とされた。ただし、科

学革命、産業革命などを経て、西欧における近代化が進むことで、保守的かつ宗教的な世界観は、ますます崩れることになる。当時、科学と宗教の間の争いという形では、科学的な進歩に基づいた世界観が、優位に立った。

ところで、元々、個人を対象にした宗教的な救済の観念は、国民という集団的な観念に代わって、救済の福音は、「進歩」の福音に変わった。その重要な共通点は、信仰(信念)の対象は、現在ではなく、そのまま将来に位置づけられたということである。重要な差は、宗教的な福音は古典化することで操りにくい一方で、進歩(というビジョンか幻想か)は、解釈の幅がより広く、その操作によって、大衆を効果的に操ることが可能になった、という点です。

したがって、個人の道徳や倫理のレベルにおいて、西洋は、日本の啓蒙思想家にとって、当然、それほど魅力的にはうつらなかつた。しかし、国民のレベルでは、耐え難い誘致を提供した。もちろん、西洋では、進歩と同時に、「個人の自由」が、広く説かれたが、それは、むしろ理論のレベルに留まっていたし、日本では、「個人の自由」は、政治的、倫理的な価値として、自由民権運動でさえ、ほとんど反応はなかつた、と言えらう。

その主張を裏付ける例として、熊本バンドと連結する、Leroy L. ジェーンズ<sup>4)</sup>という、アメリカの軍人と宗教家のことを挙げたい。彼は、熊本洋学校に、教師として招聘され、かなりよく知られた人物である。ここでは、ごく簡単に触れるが、ジェーンズは、個人として、非常にカリスマ的な人で、その指導の中心には、農業、鉱業、土木、造船などの、殖産興業的な分野があった。

そして、彼の合理的な説明の仕方は、聞き手の青年たちの心を強く掴んだ。例えば、小崎弘道が、回想しているように、彼の指導は、部分的には、キリスト教へと方向付けられたにしても、キリスト教を単なる宗教としてではなく、「天下国家に尽くす道」<sup>5)</sup>と評されている。

そして、そういうカリスマ的な人物が、ほかにほとんどいなかったからこそ、西洋文明は、個人倫理のレベルで、結局、アピール力を欠くことになったのである。ジェーンズの武人としてのカリスマ性は、当時まで残っていた儒教的な「至誠主義」の道徳的なパターンに、ぴったり適合したからこそ、異常に敬慕された指導者となったのだと、筆者は考える。

#### 4. 受容に関する文化的な諸問題

さて、明治初期のころに行われた、様々な思潮や観念などの伝来や取り入れにあたって、思想上、どのような問題が、発生したのだろうか。むろん、ここで、網羅的に応えることは、不可能であるし、そのような問題の分類、整理も必要であろう。だが、一般的には、いくつかの点が挙げられると考えられる。

まず、受容過程のかなり早い段階で、人間関係の面で、垂直的と水平的な把握の衝突が発覚した。中村敬字と安井息軒を例にしよう。中村は、慶応2年から2年間、幕府の留学生の取締役として、ロンドンとパリで生活したことがあり、そこで、儒教の理想がかなり完璧に実現されているのを見、その背景にキリスト教があるのを知った。

その後、キリスト教が、人々を「益々誠実ナラシメ」る教理であると気づき、以降、キリスト教を学び、日本にも受容させようとした。だが、その教理をより詳しく勉強するにつれ、信者と超越者の神の関係が、まったく垂直の関係であることに深い違和感を持つに至った。つまり、結局、直接キリスト教の教義の内容ではなく、その信仰の内容に基づく人間関係パターンになじめなかったのである。

また、彼の同時代人であった、安井息軒は、儒教の倫理とキリスト教の道徳の対立を見事に洞察した。彼の君父関係論の中では、次のようにまとめている。キリスト教によると、「真君真父八天

ニアリトス。(中略) 罪ヲ仮ノ君父ニ獲レバ、真君真父益々之ヲ愛シ之ガ為ニ天上の榮ヲ増シ<sup>6)</sup>。」というのである。

しかし、儒教的な社会における価値判断は、その社会と個別に存在する最高主宰者・審判者によるのではなく、実践的な判断、賞罰という手段によって、猶予無く直接的に行われているとされる。それゆえ、キリスト教的な道徳の原理は、この根本的な理由で適用不可能とされたのである。

しかしながら、おそらく、明治初期の受容の過程で最大の問題として捉えられるのは、時間の観念なのであろう。前近代的な文化、社会は、基本的には、個人を中心とし、倫理的な規範—忠孝の道なり、正道なり—によって構成され、原則としては、いつも「現在」を生きる。

そういう主張が、幕末社会について、完全に適応できるかどうかは、討論の余裕があるが、相対的には言えるといえるだろう。

そして、「国家統一」という膨大な目標を立てて、そのような社会の存在理由—それは、ほかならない富国強兵というビジョンである—が、飛躍的に将来のどこかに位置づけられてしまう。それだけでなく、その目標に達成する方法も—功利主義や外国に匹敵することも異質な観念となる。

考えてみると、明治社会が本当に積極的に、優先的に取り入れた価値や模範は、自己を再定義、再編成するものより、鉄道、工場の建設、近代組織の形成など、外国と比較するためのものの方が多かった。その近代方針は、幕末の危機感によって発生したゆえ、当然のことと思えるかもしれない。

「国家統一」という目標が達成された明治後期には、一時失われた社会的均衡あるいは秩序が、また取り戻されたようであった。しかし、国家が統一されても、それは、新しい目標の出発点に過ぎず、その後、対外に対しての国家の確立という次の目標が、ぼんやりと立ち現れた。

国民を単位とするこの段階では、近世的な儒教

の価値観だけで、社会の結束を得ることが不可能だった。したがって、天皇や国体の神秘が、将来に向けた「進歩」の福音に取って代わったし、固有の価値が、普遍的な価値に再び取って代わったのだった。近代神話が舞台に登場して、社会の自己規定プロセスが発足できるようになったわけである。

#### 注

- 1) 『昇平夜話』、91頁（松田、33）
- 2) 『蘭訳梯航』は、「日本思想大系64、洋学、上」、岩波書店、1978年に収まっている。
- 3) 渡辺和靖、『キリスト教と儒教のとの関連——明治時代を中心として』、季刊日本思想史、第6号、1978、115頁
- 4) Leroy L. Janes（ジェーンズ）は、1870年に設立された熊本洋学校に、教師として鍋島藩主に招聘され、数年活躍した。
- 5) 渡辺和靖、同掲載、118ページ
- 6) 安井息軒、『弁妄』明治6年

#### 参考文献

- ・松田宏一郎、『江戸の智識から明治の政治へ』、ベリかん社、2008
- ・松本三之介、『明治思想史』、近代国家の設立から個の覚醒まで、新曜社、1996年
- ・岩崎允胤、日本近代思想史序説、明治期前篇、上、新日本出版社、2002年
- ・Dušan Třeštík, Myslití dějiny, Paseka, Praha, 1999（ドゥシャン・トシェシチーク、『歴史を考える』、パセカ出版、プラハ